

# 多彩で多様な技術。

福岡市中央区にある福岡城跡。桜の名所や、平和台陸上競技場などスポーツの拠点として親しまれているが、城自体の魅力は案外見過ごされているかもしれない。現存する建物は少ないものの、石垣の保存状態が良く見どころも多い。石垣の「普請(土木工事)」から透けて見える福岡城の魅力とは。

1601年から約7年かけ丘陵地を生かし築城

まずは福岡城の歴史から振り返ってみよう。

福岡城は、福岡藩初代藩主・黒田長政が1601年から約7年がかりで築城したとされる。城造りの名人と評された長政の父で藩祖・黒田孝高(如水、官兵衛)も関わった。黒田家譜によると、候補地として住吉、箱崎なども挙げたものの、最終的に当時「福崎」と呼ばれていた現在地に城が築かれた。

福岡は、赤坂山から延びた丘陵地の先端にあり、丘陵を一部切断して堀を造り、高台に天守台を設けるなど地形をうまく取り入れた構造になっている。城の北側は、掘りたが埋め立てて城下町に。城の西側は、入り江を大堀(現大濠公園)に造り替えた。

城内は、天守台を中心とした「本丸」と、二の丸御殿などがあつた「二の丸」、有力家臣の屋敷などもあつた「三の丸」に分かれており、三の丸に設けられた三つの門(上之橋御門、下之橋御門、追廻御門)で城外とつながっていた。

二の丸の北側石垣を中心に見られるのが「C類」。玄武岩の野面石が主に使われ、積み方は布目崩し積みだ。出隅は算木積みだが、花崗岩を加工した石(割石)が使われるようになっている。

## 積み方技術で4分類 まるで「石垣の博物館」

石垣にはいろいろな特徴があるのだから。福岡市の「福岡城跡保存整備基本構想」や「新修福岡市史特別編 福岡城 築城から現代まで」によると、福岡城は基本的に「本丸」↓「二の丸」↓「三の丸」の順に造られ、石垣はその積み方から「A類」「B類」「C類」「D類」の4種類に分類されるという。本丸の天守台や小天守台東側など

D類。花崗岩の割石が大きく、堂々とした造り



C類。積み方は石が複雑に積まれた「乱層積み」に



B類。出隅は花崗岩の割石を使った算木積み



## 「福岡城の石垣」



A類。野面石(加工していない石)を積んだ「布目崩し積み」。出隅(角)は、石の長辺と短辺を互い違いに組んだ「算木積み」だが石の大きさがふぞろいで未発達



◎「B」の刻印  
◎刻印ではないが、へこみがハート形に見える石も



◎歯形のように見えるのが「矢穴」。クサビを使って石を割った痕だ



◎「虎口」(出入口)の形状も美しい



に見られるのが「A類」。主体となる石材は礫岩や玄武岩で、加工を施していない野面の石が使われている。積み方は、横目地を意識した布目崩し積み。出隅(角)は石を交互に重ねた算木積みだが、石の大きさが違うなどまだ未発達な状態だ。

本丸の南側などに見られるのが「B類」。玄武岩の野面石が主に使われ、積み方は布目崩し積みだ。出隅は算木積みだが、花崗岩を加工した石(割石)が使われるようになっている。

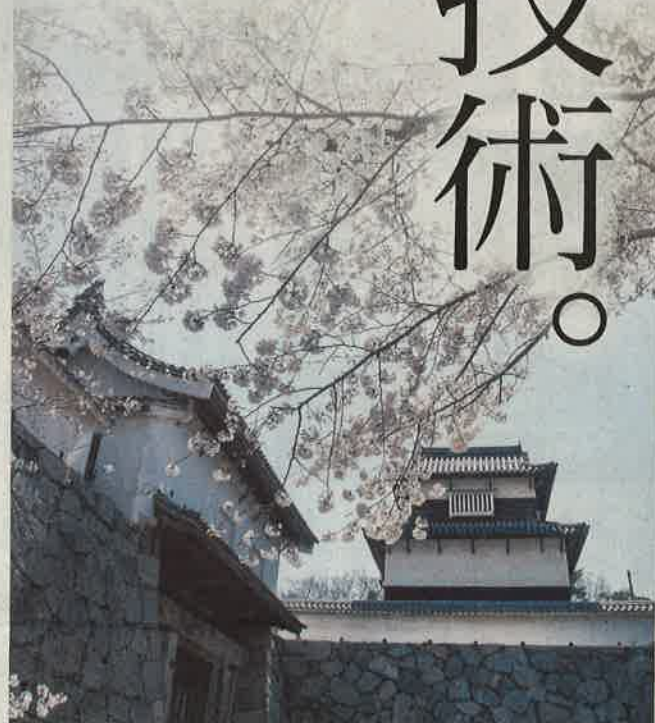
二の丸の北側石垣を中心に見られるのが「C類」。玄武岩の野面石に加え、花崗岩の割石も使われており、積み方は石が多方向を向き強度を増した乱層積み。出隅もより整然とした花崗岩の算木積みとなっている。三の丸の上之橋御門などで見られる「D類」は、C類の発展形と言え、乱層積みで花崗岩の割石が大きく、出隅は花崗岩の算木積みとなっている。

技術的に「A類」↓「B類」↓「C類」↓「D類」に変遷していったとも考えられ、同市史整備活用課の長家伸課長は「多様な積み方を今に残しており、石垣の博物館ともいえる」と指摘する。

## 壮大な土木工事 石には謎の刻印も

これほどの石材をどこから持ってきたのか。当初は藩主の前居城・名島城

桜の美しい季節に撮影。下之橋御門付近  
=2021年3月



城内の桜。まるでじゅうたんのように



福岡城の全景。「福岡城下町・博多・近隣古図」部分(九州大学附属図書館所蔵)

●この企画への「意見」感想をお寄せください。  
<宛先>TEL:092-8721(住所不詳)  
西日本新聞社メディアプランニング部  
「博多モノ語り」係  
企画・制作/西日本新聞社メディアプランニング部

このシリーズは、風土が生んで、歴史が育てた博多のカタチ・地域の誇りを紹介するものです。物言わぬモノたちの声を聞いてください。

博多モノ語り  
シリーズ91